「モノと情報」班　C

東南アジア大陸部諸社会の文脈からみたモノ研究の可能性
―「モノと情報」班ワーキング・セミナーの活動を通して―

清水郁郎（総合地球環境学研究所・技術補佐員）

キーワード：東南アジア大陸部、モノ、移住、国境、キリスト教（改宗）
調査期間と場所：国内、2003 年 9 月～現在

Possibility of the Study on Things Viewed from the Context of Mainland Southeast Asian Societies: Preliminary Report from "Material Culture and Digital Archives" Research Group's Working Seminar

Ikuro SHIMIZU (Research Institute for Humanity and Nature, Technical Assistant)

Keywords: Mainland Southeast Asia, Things, Migration, Border, Conversion, especially to Christianity
Research site and period: Domestic, 9/2003-

要旨：昨年度おこなわれた「モノと情報」班の第 4 回ワーキング・セミナーでは、東南アジア大陸部社会に特徴的な事象を人類学的、民族誌的に踏まえたモノ研究の可能性が議論された。この報告書は、そこで議論された諸問題を再度整理し、同地域におけるモノ研究の今後の方向性について検討するものである。

1. はじめに

2003 年度に立ち上がった「モノと情報」班（以下モノ班）では、これまでに「道具の検討会」と題するワーキング・セミナーを開催してきた。とくにその第 4 回目におこなわれたセミナーでは、東南アジア大陸部の諸社会においてモノの調査、研究をおこなう場合に有益な視点が得られた。本稿の目的は、このセミナーがどのような問題意識のもとにおこなわれたのかを報告するとともに、そこで論点となった諸問題を再度提起、検討し、ラオスでの現地調査においてどのように活用できるかを探ることである。

2. ワーキング・セミナー

1)「道具の検討会」の目的[1]

モノ班が立ち上がった当初、モノ班班員のあいだでは、①東南アジア大陸部の物質文化に関する共通理解を構築すること、②個々の班員が将来、東南アジア大陸部で調査活動をおこなうことを想定して、当該地域の物質文化をとらえる視点を獲得することの必要性が議論された。それは、モノ班の活動のひとつが、日本国内各地の博物館に収蔵されている東南アジア関係の収蔵資料の把握と分析であることからして[2]、必然であった。「道具の検討会」と題するワーキング・セミナーは、こうした問題意識からはじめられた。そして、このセミナーは、今日までにモノ班の活動の重要な一部となっている。セミナーでは、当該地域の多様な物質文化のうち、とくに生業に直接関係する道具としてカゴ、刃物、漁具、狩猟具を取り上げ、そのそれぞれに関して議論されてきた[3]。このセミナーは、当該の道具に関する専門的な知識を有する研究者を招いてレクチャーをしてもらうという形式ですすめられた。また、会によっては、国立民族学博物館に収蔵されたラオス資料の調査から班員みずからが得た知見を発表し、地球研内外の研究者と意見を交換したり議論をしたりするというかたちをとった。

本稿は、これらのワーキング・セミナーのうち、とくに第 4 回における議論を踏まえて、東南アジア大陸部におけるモノ研究の可能性を探るものである。

2) 第 4 回目セミナーの位置づけ

本稿で下敷きとする第 4 回目のワーキング・セミナーは、その位置づけが他の会とは異なる。第 4 回目に招聘したのは、特定のモノに関する専門家ではなく、東南アジア大陸部の山地や平地の諸社会においてフィールドワークをおこなってきた人類学者である。実際のセミナーでは、個々のフィールドの事例（チェンライのラフ、雲南のハニ＝アカ、タイ中部のモン）に即してその集団の物質文化の特徴を紹介してもらい、あわせて物質文化をとらえる視点を提示してもらった。

このセミナーで人類学者を招いた理由は複数ある。ひとつは、モノ班がおこなっていた博物館の収蔵品調査に関係する。先に述べたように、モノ班の活動のひとつに、国立民族学博物館をはじめ、奄美大島の原野農芸博物館や鹿児島県歴史資料センター黎明館に収蔵されている資料を調査し、共有可能なデジタル・アーカイブをつくることがある。これらの収蔵資料を調べる過程で、大陸部山地社会で収集された資料がかなりの数を占めていることがあきらかになった。モノを理解する前提として、これらの社会について知見を得ることが必然的に要求されたわけである。また、同時に、将来的な調査の展開を予測して、山地社会への理解、低地の人びと山地の人びとの社会経済的諸関係を視野に入れる必要性も想起された。

もうひとつの理由は、中心的にワーキング･セミナーをおこなってきた班員たちに共有された問題意識による。筆者を含む班員たちは、モノそのものの詳細な情報を知ることとは別に、モノを分析することからいかに社会の様態やその背景にある文化的事象にアプローチするかを問題として立てていた。モノの分析から社会にアプローチし、そこでの人びとの生活を理解する筋道を得ようとしたわけである。そう考えるならば、第 4 回目は、フィールドで生起する「現実」とモノとを結びつける思考訓練の場であり、なおかつフィールドワークの想像力を獲得するための場でもあったといえるだろう。

3. モノの位相：地域社会の文脈からの把握

第 4 回目セミナーの問題意識は、民族誌的な事象を将来の調査においてどこまで射程に入れたらいいかという問題につながる。これは、東南アジア大陸部に限らずいえることだが、ある地域において調査研究をおこなう場合、背景知識として、その地域なり社会、集団、個々人の諸活動について概略を知れば、より多様な切り口を獲得できることは間違いない。その素材となるのが民族誌的記述である。

民族誌的な事象とからめてモノをみるという発想は、いってみればモノの背景を微視的に探求することにほかならない。モノそのものを詳細に調べることと同時に、モノが存在する社会的文脈を読み取ることもモノ班の活動においては重要である。モノそれ自体の詳細な検討や伝播論のような鳥瞰的な視点からのモノの位置づけに加えて、モノを扱う人びとがどういう人びとなのか、どのような背景を持って生きているのか、モノをどのようなときにいかに使うのかという、まさにモノと人の相互関係を射程に入れようというわけである。

さて、以上のような問題意識にもとづいてこれからいくつかの論点を検討する。ここでは、第 4 回ワーキングに沿いながら問題を整理することになる。東南アジア大陸部にはさまざまな社会があり、個々の社会に生きる人びとの文化的背景も多様だが、現在の広く共有された問題意識に即していえば、自律して閉じた社会は考えられないし、そこにいる人びとも静態的ではない。国家との関係や他集団との関係を常に想定しなければならないし、モノもそれを踏まえて布置させて考えるべきである。こうした観点から、移住、国境の越境、エスニックな境界の越境、改宗またはキリスト教の受容という問題系を設定して、モノの様態を考察してみた。これらの問題系は、当該地域の人びとが置かれた現在的状況とも密接に関連する。モノを社会とそこに生きる人びとの諸活動との関連からとらえることを目的とするモノ班の活動にとって、重要な意味を持つだろう。

1) 移住（マイグレーション）

歴史的にみれば、大なり小なり大陸部のほとんどすべての社会が移住を経験している。現在は低地に政体を組織して国家を形成する集団も、移動のはてに現在の場所に居住しはじめた。ひとつの集団の移動は、既居住集団に多大な影響をもたらした。たとえば、現在のタイにおける主要な集団であるタイ系の人びとは中国の南部から南下したが、その影響により、先住の諸集団は周縁に追いやられたり同化したりしていった。これの例として

は、ラワやモンがいる。現在はタイ北部の山地に居住するラワは、７～８世紀頃にタイ系集団が移動してくるまでは低地に住んでいた。しかし、チェンマイを中心とするラーンナータイ王国の勃興により周縁部の山地に押しやられた[4]。モンもまた、タイ系諸集団の南下前には、チャオプラヤー川流域にドヴァーラヴァティ王国を、北部のランプーンにハリプンチャイ王国を興していた。前者はどこに所在したのかいまだに明確になっていないが、後者はラーンナータイに滅ぼされた。現在、その末裔の人びとは、タイの政体に飲み込まれ、タイ社会に同化している。

メコン河やチャオプラヤー河流域に展開して覇権を争った諸政体は、当初からその領域を明確にしていたわけではない。当時の大陸部では、「ムアン」と呼ばれる小規模で自律的な政治・地理単位が各地方にあり、それらが衝突を繰り返していた[5]。そして、クメール王朝を滅ぼしたスコータイのように、覇権を握ったムアンが在来の政体を駆逐してその領土を拡大し、王国を建立していった。こうしたムアンには中心となる王都があり政治権力は存在したが［石井他 2001: 405］、近代国家のように明確な領域観はなく、またその具現である国境は不明瞭のままだった。

移住は大きくは大陸部の巨視的変遷と関連するが、近年においても移住を経験した人びとが大陸部には数多くいる。この場合の移住にはいくつかの要因が考えられ、また、当の集団が大陸部においてどのような立場にあったかということも移住の特質と関係してくる。たとえば、移住が積極的におこなわれたのかそれとも消極的あるいは強制的におこなわれたのかということも考慮しなければならない。大陸部の山地民は、しばしば、農地を求めて南下を繰り返して移動してきたとみなされる。この場合は、移動が積極的におこなわれたというべきだろう。また、戦争のような人員の大規模な移動をともなう場合にも、既居住者はゆるやかに周縁に押しやられるのか、それともひとつの地域の人員がそっくり入れ替わるのかということや、移動の後に在来の集団と後着の集団とのあいだに友好的に貢納関係が結ばれるのか、それとも強権的な支配がおこなわれるのかといった違いも考慮しておくべきだろう。吉野が報告するタイ北部のミエンは、他者の戦闘に巻き込まれるかたちで移住を余儀なくされた事例である［吉野 1991］[6]。さらに歴史をさかのぼれば、中国におけるラフのように、中央政権に対する反乱とその敗北から逃走を余儀なくされたという事例もある［片岡 : 1998, 2003a］。

本稿では、このように移住という多様な現象とモノとの関連を、近年に移住を経験した人びとの事例からみていく。具体的には、アカやミエンのようないわゆる山地民と呼ばれる人びとである。東南アジア大陸部の山地民は、その多くが中国南部を故地として、ラオスやタイ、ミャンマー（旧ビルマ）に移住してきた。現在でも、ゆるやかになったとはいえその南漸運動は続いている。

白鳥や常見は、北タイのヤオの村落における調査において、彼、彼女らがどのような理由で移住を繰り返してきたのかを詳しく報告している。それによれば、①耕作地の枯渇、②人口の増加、③疫病の流行、④異種の集団の侵入と占拠、⑤村落内の不和から一部の家族が離脱する、などが移住の理由としてあげられている［白鳥 1978: 67-97; 常見 1980: 186］。「山地民」の内実は多様であり、その移動の経路も多様であるが、これらの指摘は異なる言語集団に属する山地民にも、かなりの部分当てはまると考えてよい。たとえば、北タイのアカの一村落における筆者の調査経験によれば、村人たちはこのうちの④に当てはまる出来事をきっかけにして移住をはじめた。この集団は、もともとはミャンマーのシャン州にある山地にかなり長いあいだ住んでいた。しかし、中国国民党軍やミャンマー軍などの闘争に巻き込まれ、やむを得ず村落を放棄して離散した。そして、数年ごとに別々の村を経由しながら南下を続け、最終的にタイに越境したのは２０数年前である。この移動の過程で、①、②、③および⑤が複合的におこっている。

ここで移住一般の特質を、モノとからめて考えてみる。移住は、人びとの多大な労力を要する。また、山地における移動では、基本的に人員の数も限られ、また肉体的な労力を多大に費やすものだから、多くの所有物をつぎの移住先に運ぶことはできない。そこで、移住を契機にあるものは捨てられたり、移住先で新たに購入されたり、作りだされたりすることが考えられる。移住先で他集団と隣接して暮らすならば、そこからの影響を受けるという可能性がある。ワーキング・セミナーでは、片岡が、北タイのラフの事例をもとにこの点を指摘した。北タイのラフには、数多くのサブ・グループがあり、そのサブ・グループごとに移住の経路もタイへの流入過程も異なる。当然、移住先における他集団とのあいだに、言語や物質文化などの多様な文化接触がある。たとえば、ミャンマー経由でタイに流入したラフ・ニ（赤ラフ）の場合、そもそも中国での改土帰流前[7]に中国からの南下

をはじめた。そして、タイに流入するまではシャンなどのタイ系の集団と隣接して暮らすことが多かったので、シャンの影響が強いとされる。一方、ラフ・ナ（黒ラフ）の場合は、改土帰流後に中国を脱出し、戦後、国民党軍とともにタイに流入したので、一定の漢化を受けていると考えられる。こうした移動の経験の違いが、モノに具現される。ひとつの例が、食事におけるレンゲと箸の違いである。ラフ・ニはレンゲを使い、ラフ・ナは箸を使うことが多いことを、片岡は報告している［片岡 2003b］。

ラフのこの事例は、皮相には飲食の道具の違いにしか見えない事象が、移住という経験と関連していることを端的に示すものである。そして、食事の作法や食されるものの違いにまで、両者の違いは拡大しているかもしれない。レンゲや箸という単一の道具を道具として詳細に探ることからは、こうした視点は生まれない。サブ・グループの存在やその移動の過程とあわせてモノを並置して、それを使う人びとや集団の様態にアプローチしたとき、モノへの新たな視点が生まれる可能性が開かれるのである。

2) 越境（トランス・ボーダー）

移住とも深く関係するが、越境もまた大陸部を特徴づける事象のひとつであり、モノを社会との関連で考えるうえで視野に入れておくべきだろう。この越境という現象を、ワーキング・セミナーではふたつの視点から議論した。ひとつは、文字通りに国境を越えておこなわれる交易などの諸活動であり、もうひとつは、エスニックな境界の越境という局面において、モノがどのように変化するのかという問題である。

前者は、近年になって提唱されたいわゆる「国境の人類学」とも深く関連するが［Wijeyewardene 1990; 綾部 1993, 1998］、モノ研究の文脈では、国境をまたいでモノがどのように流通、交易、売買されるのかがとくに問題になるし[8]、資源の違いを利用した商売の可能性という点で、人びとによる国境の「戦略的」活用も考えられる[9]。

後者は、ある種のモノがエスニック・アイデンティティ[10]と結びついていると仮定したら、エスニックな境界が揺らぐとき、そのモノはどのように変化したり、モノの使い方が変化したりするのかを探ろうという視点である。たとえば山地社会の人びとが経済活動の拡大などで低地社会の経済活動に参入したり、強制的に移住させられたりしたことで、モノがどのように変わるかという問題が考えられる。また、集団内部において、サブ・グループ間の差異を識別するさいに、モノがどのように機能するのかという問題にも展開できるだろう[11]。

(1) 国境

東南アジア大陸部に限らず、一般に、国境は所与のものではない［cf. Thongchai Winichakul 1994］。それをもっとも明確に認識できる場所のひとつに北タイの山地がある。中央（政府）の統制からは距離をおき、近年まで取り立てて強く国家に統合されてこなかった社会である。北タイの山地では、現在でも、ミャンマーからの越境者は後を絶たない。たとえば、アカの村落では、ミャンマーや中国の雲南省からの移住者に出会うことがある。彼らは、仕事を求めて越境してきた若者であったり、ミャンマーからさまざまな理由により越境してきた家族であったりする。そして、既存のアカの村落に住み着く。かつてミャンマーのシャン州で生き別れた親類が、タイ側の親類の家を拠点にして長期間滞在することもある。そのあいだに、ミャンマーや中国のモノを北タイの山地で売るわけである。

アカに限らず、こうした越境をともなう経済活動は今にはじまったことではなく、昔からおこなわれていた。たとえば、雲南のイスラム教徒の漢人（Yunnanese Muslim）は、19 世紀までに、大陸部のかなり広い範囲で、隊商を組んで商売をしていた［Hill 1983］。こうした国境を越えてくるモノとその売買、それに従事する商人やモノを購入する人びとが、この場合の考察対象になるだろう。ここでは、フィールドにおける筆者の知見と照らし合わせてみよう。

北タイのアカの村落では、先述のように、ミャンマーから商売に来るアカがいる。そこで売られるのは、山刀に代表される刃物、アクセサリーやビーズ、銀製品、衣類などの布製品、中国やミャンマー産の膏薬や漢方薬などが主である。市街の市場でも山刀は売られているが、仕上げが粗いと評される。たとえば柄の部分は竹製だが、芯が中空になっている。また、刃の部分と柄の部分の双方が粗雑なつくりをしていると語られる。山地の製品は、一振りが 120 ～ 200 バーツほどだから、値段は市場のものとそう変わらない。しかし、市場のものに比

べて丁寧につくりこまれている。市場品と同じく竹の柄を使うが、表面が丁寧に加工されているし、中空ではなく繊維が密に詰まった部分を使っている。また、大きな違いは、市場品は鞘がついていないが、山地の品は鞘つきである。村人のほとんどは、こうした理由から商売人が持ち込んだ刃物を購入する。

銀製品は、おもに女性の装身具や頭飾りなどだが、タイの市場で購入することはほとんどできない。アカの村落には従来、銀製品の製作を手がける細工師が少なからずいたというが、現在ではまれである。そうしたこともあって、女性にとっては、ミャンマーから越境してくる商売人の存在は貴重である [12]。

(2) エスニシティ

大陸部には、それぞれに異なる文化的背景を持つ多様な集団が隣接して生きている。これもひとつの特徴といえるだろう。これに関連して、この地域の人類学的研究で議論されてきた問題のひとつにエスニックな境界とその越境や揺れがある。その嚆矢となるリーチが描いたのは、ミャンマーのカチンにおける動態であったし［リーチ 1995］、北タイの山地では、しばしばエスニシティを使いこなす人びとがみられる［綾部 1999］。そのようなエスニックな境界とモノとの関係について、ある集団が他の集団に隣接したり、あるいは完全に包摂されたりしたときの事例から考えることが可能だろう。

ワーキング・セミナーでは、ラフにおいて宗教的なモノ（儀礼道具や儀礼小屋）に漢人の影響がいかにあらわれるかということが話された。ラフには、一般にトボーと呼ばれるシャーマンがいる。このシャーマンがおこなう宗教儀礼の中では、多様な超自然的存在について言及される。その中には、漢人出自と考えられる存在がいる。病気治療の場などで、このような存在から託宣を得るわけである。いわば、ラフにとっては、超自然的な力と漢人の表象が結びついているのである。儀礼的行為という特殊な場合の他に、現実にラフの日常を構成するモノに関しても、同じように漢人からの影響がみられる可能性がある。

稲村は、エスニックな境界とモノとの関係について、大陸部とくに中国の「ハニ＝アカ」[13] 集団に関する研究から報告している。稲村によれば、「土司制度」[14] をめぐるハニ＝アカ集団の特徴とモノ（家屋など）の性向とのあいだには関係が認められる［稲村 2003］。たとえば、地域によって土司がどのような集団を志向するかには違いがある。紅河のハニでは土司は漢族を志向する。また、元陽や緑春のハニでは土司は「イ語系」を、西双版納のアカでは土司はタイ系を志向するという。そして、たとえば紅河のハニでは、土司の家屋は漢族のそれのように地床式で建てられるという特徴がある。家屋は、しばしばそこに住む人びとの権力認識と結びつけられ、権力を表象する装置となるが [15]、中国においてもそのような事例がみられるわけである。

ワーキング・セミナーでは、稲村が提示した事例の他に、山地民の低地社会（タイ社会）への参入や山地での異集団間での婚姻（アカとヤオ、雲南系中国人と山地民）などの局面とモノの様態があわせて議論された [16]。この他に、中国の少数民族における漢化の影響 [17] や、山地民が職を求めたり低地での居住を目指して都市や都市部近郊に移住したりする局面において、モノはどのように変化するのかといった [18]、現在的な状況にも目配りしながらモノの分析をすすめる必要があるだろう。

3) キリスト教の受容と改宗（コンバージョン）

ある種の現象をモノの変化からとらえることは、モノ班の活動においてスリリングな議論をもたらすに違いない。言語によって表現される以上のことが表現される可能性があるし、なによりも人びとの日常は言語と同等あるいはそれ以上にモノによって組織されているからだ。冒頭に述べたように、東南アジア大陸部には、文化的背景の異なる多様な人びとが、それぞれに社会を組織して生きている。そうした社会組織のひとつの「動力」が宗教や、広く「民族宗教」とくくられる在来の観念であることは間違いない。最後の問題系は、宗教の変化、具体的には在来の宗教的事象からキリスト教や仏教などの世界宗教への「改宗」やその受容 [19]、または共産化のような国家の政治体制の変化により宗教または宗教的事象が変化したり放棄されたりする局面で、モノがどう変わるかということである。ただし、これを知るためには、当該社会における在来の宗教または宗教的事象がどのようなものであったのか、人びとの社会生活が改宗をへてどのように変わったのかを詳細に知っておく必要があることはいうまでもない。ここではその点を認識したうえで、ひとつの例として大陸部の山地社会において、宗教的事象の変化がモノと人の在来の関係にどのように影響するのかを述べる。

山地社会における世界宗教への改宗またはその受容という現象は、一見して明確に切り取れるわけでも直接に観察できるものでもない。その宗教の教義を詳細に知らなくても、人びとは容易にその宗教の信者になることができる。また、ある日を境にたとえばキリスト教徒になったとしても、その日から当人の生活が大きく変化するということもない。それは、日々の暮らしの中で徐々に進行していく。そして、人びとの語りの中にその兆候がさほどみられないという反面、人びとの生活を構成するさまざまなモノにその変化の兆しを求めることが、場合によっては可能となる。

北タイのアカの村落では、近年、キリスト教徒になるものが多い。しかし、彼、彼女らがキリスト教の教義や知識を知悉しているわけではない。彼、彼女らがキリスト教徒であることを理解するには、キリスト教徒になることによって集合表象的なものからどのようにして解き放たれるかという視点が必要である。ひとつの例として家屋について述べる。

慣習的な世界に生きるアカはロゥチと自称する。ロゥチにとって、自分の祖先や、その上位世代にいてアカを生み出した始祖である超自然的存在との紐帯は非常に重要である。現世での自身の出自を保証する、すなわち自身の存在の根拠となるものだからである［清水 2002, 2003, 2004］。アカは、この紐帯を維持するために、祖先をまつる祭壇を大切に扱う。また、主食である稲の育成の折々に祖先祭祀をする。家屋は、祭壇が設置される場所であり、祖先祭祀がおこなわれる場でもある。家屋は、アカにとって祖先との紐帯を維持するうえで重要であり、祖先から伝えられた知識が具体的なかたちをとって表出していなければならない。それゆえに家屋は一定の形式を持っているし、祖先から伝えられた慣習的な知識に沿って家屋での日々の生活を送るわけである。

キリスト教徒になることは、祖先との紐帯を放棄することである。だから、キリスト教徒になるための手続きは、家屋から祭壇を取り出し、それを捨てにいくという儀礼的行為からはじめられる。しかし、その後は、日曜日に礼拝に行くことや年に数回キリスト教の儀礼をこなすということの他に、生活上に取り立てて目立つ変化はない。ところが、彼、彼女らが家屋を新築したり改修したりするときに、キリスト教徒であることの証左が明確にあらわれる。

キリスト教徒にとっては、祖先との紐帯はなんら意味を持たないのだから、家屋とそこでの生活の形式が保持される必要はない。キリスト教徒がロゥチのそれに比べて極めて自由に家屋をつくるのはそのためである。たとえば、ロゥチの家屋の屋内は一枚の壁によって二分されており、男女はそれぞれ、ひとつの居室でまとまって寝食をおこなう。しかし、キリスト教徒の家屋では、壁が取り払われ一室空間となり、男女同衾も可能になる。

ロゥチの慣習的知識とは、儀礼や日常生活の多様な活動だけでなく、リネージ分節や婚姻規則、姻戚の役割にまで関与するいわば社会文化的なサブシステムである。北タイにおいて、キリスト教徒のアカの村落で調査したカメラーは、この慣習的知識とキリスト教との「交換（replacement）」により、どのような変化がアカのあいだに起きたのかを検証した［Kammerer 1990a, 1990b］。カメラーによれば、プロテスタント派の信者のあいだでは、祖先祭祀や米をめぐる儀礼、「母方の兄弟」が関与するような儀礼のすべてが放棄されていた。一方、カトリックの信者のあいだでは、祖先祭祀はおこなわれないが、「母方の兄弟」が関与するいくつかの儀礼は残されていた［Kammerer 1990b: 335］。また、アカにはもともと、婚姻の規則に関係し、なおかつ系譜上で分枝して新たな下位集団をつくるいわゆる「サブリネージ」があるが、カメラーによれば、キリスト教徒のあいだでは、ロゥチのようなサブリネージの機能が失われつつある［ibid. : 333］。さらに、結婚において結ばれる妻の与え手と妻の受け手の関係、すなわち姻戚関係も変化する。

ロゥチのあいだでは、「母方の兄弟」に代表される姻戚は、「幸福」をもたらしたり災厄のときに加護を求めたりする対象であり、特別な意味を持った関係である。カメラーは、こうした姻戚関係は、少なくともプロテスタント派の信者のあいだではすでに構築されなくなっていることを報告する［Kammerer 1990b: 334］。筆者が調査をおこなった北タイのアカの村落では、プロテスタント派の信者とカトリックの信者の双方とも、ロゥチがおこなう祖先祭祀や全村的な祭礼、治療儀礼、結婚式や葬式などは完全におこなわない。つまり、姻戚との関係を確認しうる儀礼の機会はすでに存在しなくなっている。従来、姻戚関係は、おもに儀礼的な諸行為と関連してきたが、こうした関係の消滅により、儀礼において使用されてきたモノ（「母方のオジ」のために用意する特別な食器やプレゼント）などにも変化がみられることになる。

改宗という現象のこのようなモノへの発現が、他の集団や社会においてみられるのだろうか。改宗において

捨てられるモノや使われなくなるモノ、その逆に、改宗後に新たに使われたりつくられたりするモノはなんだろうか。もっとも最初に想起されるのは、アカの事例にみられるような儀礼的行為に使われるモノ＝道具の変化だろう。たとえば、従来使用されていた儀礼道具が放棄される代わりに、キリスト教の儀礼道具が揃えられることが考えられる。また、聖書のように、従来みられなかったモノが使われるようになるということも考えられるだろう。

4. おわりに：総括

本稿では、「東南アジア」や「民族集団」への還元という陥穽にとらわれることなく、社会とそこに今生きている人びとのモノとの関係にアプローチする視点を提示しようと試みた。そのひとつは、モノが使われる社会やそれを使う集団の背景を動態的に把握する視点と言い換えることができる。その集団がどのような歴史をたどってきたか、国家がその集団にどのようにかかわってきたのかという視点である。また、たとえばタイにおける国民統合の過程、ラオスにおける国家成立の歴史、中国における「民族識別工作」などと、集団がその中でどのような立場におり、どのように扱われてきたのかを把握することが肝要になる。

もうひとつの重要な点は、人びとや集団への微細な視点、換言すれば民族誌的な視点の必要性である。動態的な問題系とは逆のベクトルになるが、対象となる集団に関する民族誌的な理解が、その集団のモノを理解するうえで大きな意味を持つことは、ワーキング・セミナーから示された。

最後に、人びとの「語り」を中心としたモノ研究の可能性について述べる。これは、モノそのものの物質的な理解に加えて、人びとの諸行為や社会をモノを通して理解しようと試みようとする場合には避けては通れない問題であるし、現地調査において、現地の人びとがモノをどのように考え、解釈しているのかをとらえるさいのテクニカルな部分とも関連する。タイのモン社会を事例として、大島は、この問題を認識論的に対象化した［大島 2003］。大島によれば、人類学における従来のモノ研究では、モノに対する３つの視点がある。①モノそのものの持つ客観的事実＝語るモノ、②モノと生活している人びとの語り＝語られるモノその１、③モノに対する研究者の分析視点＝語られるモノその２、という３つである。従来のモノ研究にみられるアプローチと問題点は、視点①による理論化において視点③が入り込むために、科学的客観性が希薄になる可能性があること、③において時代相や研究者の置かれた社会的文脈も考慮する必要があること、視点②＋③の例としての象徴分析において②と③が混同されること、②そのものが時代相や社会的文脈の変化に伴い変わる可能性があることとまとめられる。これらのうち、とくに②に関連していえば、フィールドワークでは、ひとつのモノについても必ずしも一様に語られるわけではないことが予想される。人びとの「語り」という本質的に多様なものを対象とする場合の宿命ということもできるが、現地調査では、モノと生活している人びとの語り自体に多様性（多声性）があることにも留意していかなければならないだろう。

Summary: In November, last year, “Material Culture and Digital Archives” Research Group’ s 4th working seminar was held at RIHN. In that seminar, possibility of the study on things in social contexts of Mainland Southeast Asia was argued from anthropological and ethnographical points of view. This paper picks the subjects that were argued there up again and examine the future directionality of field research in the area.

文献

綾部真雄

1993「タイ北部山地民社会と平地政体―＜国境＞の成熟へ呼応した＜チャオ・カオ＞の形成―」『社会人類学年報』19:65-90。

1998「国境と小数民族―タイ北部リス族における移住と国境認識―」『東南アジア研究』35(4): 171-196。

1999「民族への帰属とクラン・イデオロギー―リスであることの論理的整合性をめぐって―」『社会人類学年報』25: 55-87。

Carsten, J. and S. Hugh-Jones

1995 Introduction: About the House-Levi-Strauss and Beyond, in J. Carsten and S. Hugh-Jones (eds.), About the House: Lévi-Strauss and Beyond, Cambridge: Cambridge University Press.

Chupinit Kesmanee

1988 Hill Tribe Relocation Policy in Thailand, Cultural Survival 12(4): 2-6.

Elawat Chandraprasert

1997 The Impact of Development on the Hilltribes of Thailand, in D. McCaskill and K. Kampe (eds.), Development or Domestication? Indigenous Peoples of Southeast Asia, Chiang Mai: Silkworm Books, pp. 83-96.

Eudey, A. A.

1989 14 April 1986: Eviction Orders to the Hmong of Huai Yew Yee Village, Huai Kha Khaeng Wildlife Sanctuary, Thailand, in J. McKinnon and B. Vienne (eds.), Hill Tribes Today, Bangkok: White Lotus, pp. 249-258.

速水洋子

1992「カレン族における周縁の力と宗教・社会変動― 19 世紀ビルマから今日のタイまで―」『民族学研究』57(3): 271-296。

1994「北タイ山地における仏教布教プロジェクト：あるカレン族村落群の事例」『東南アジア研究』32(2): 231-250。

ハイネ＝ゲルデルン，R.

1972「東南アジアにおける国家と王権の観念」大林太良訳　大林太良編『神話・社会・世界観』角川書店，pp. 263-290。

Hill, A. M.

1983 The Yunnanese: Overland Chinese in Northern Thailand, in J. McKinnon and Wanat Bhruksasri (eds.), Highlanders of Thailand, Kuala Lumpur: Oxford University Press, pp. 123-134.

星野龍夫

1990『濁流と満月　タイ民族史への招待』弘文堂。

稲村務

1994 『ハニ族（アカ族）の動態的民族誌への試論―雲南省西双版納のハニ族の村落から―』筑波大学地域研究科修士論文。

1996a『「アカザン」の構築―北タイ・ビルマ・中国における「アカ種族」の文化の実体化―』筑波大学博士課程歴史・人類学研究科中間評価論文。

1996b「アカ族・ハニ族・アイニ族―中国雲南省西双版納州における『アカ種族』の国民統合過程―」『東南アジア―歴史と文化―』25: 58-82。

2003『ハニとアカ』「モノと情報」班第 4 回ワーキング・セミナー「タイ北部山地民社会研究からみた東南アジア稲作民族文化総合調査関連資料の多角的分析」『総合地球環境学研究所　アジア・熱帯モンスーン地域における地域生態史の統合的研究』討論資料 , 11 月 26 日 , 総合地球環境学研究所。

石井米雄

1991 『タイ仏教入門』めこん。

石井他監修

2001 『東南アジアを知る事典』平凡社。

Kammerer, C. A.

1988 Of Labels and Laws: Thailand' s Resettlement and Repatriation Policies, Cultural Survival 12(4): 7-12.

1990a Customs and Christian Conversion among Akha: Highlanders of Burma and Thailand, American Ethnologist 17: 277-291.

1990b Transformations in Kinship among Akha (Hani) Christians of Highland Northern Thailand, Proceedings of the 4th International Conference on Thai Studies 1, Kunming, pp. 330-338.

1996a Discarding the Basket: The Reinterpretation of Tradition by Akha Christians of Northern Thailand, Journal of Southeast Asian Studies 27(2): 320-333.

1996b Begging for Blessing among Akha Highlanders of Northern Thailand, in C. A. Kammerer and N. Tannenbaum (eds.), Merit and Blessing in Mainland Southeast Asia in Comparative Perspective, Connecticut: Yale University Southeast Asia Studies, pp. 79-97.

片岡樹

1998「東南アジアにおける＜失われた本＞伝説とキリスト教徒への集団改宗―上ビルマのラフ布教の事例を中心に―」『アジア・アフリカ言語文化研究』56: 141-155。

2003a「悪魔の神義論―タイ国の山地民ラフにおけるキリスト教と土着精霊―」『民族学研究』68(1): 1-22。

2003b『タイ国のラフ文化についての背景知識』「モノと情報」班第 4 回ワーキング・セミナー「タイ北部山地民社会研究からみた東南アジア稲作民族文化総合調査関連資料の多角的分析」『総合地球環境学研究所　アジア・熱帯モンスーン地域における地域生態史の統合的研究』討論資料 , 11 月 26 日 , 総合地球環境学研究所。

Keen, F. G. B.

1983 Land Use, in J. McKinnon and Wanat Bhruksasri (eds.), Highlanders of Thailand, Kuala Lumpur: Oxford University Press, pp. 293-306.

Keyes, C. F.

1971 Buddhism and National Integration in Thailand, Journal of Asian Studies 30(3): 551-567.

リーチ，Ｅ.

1995『高地ビルマの政治大系』弘文堂。

McKinnon, J.

1983 Behind and Ahead, in J. McKinnon and Wanat Bhruksasri (eds.), Highlanders of Thailand, Kuala Lumpur: Oxford University Press, pp. 326-335.

1987 Resettlement and Three Ugly Step-Sisters Security, Opium and Land Degradation: A Question of Survival for the Highlanders of Thailand, Paper presented to the International Conference on Thai Studies, The Australian National University, Canberra, 3-6 July.

1997 The Forest of Thailand: Strike Up the Ban? in P. Hirsch (ed.), Seeing Forest for Trees: Environment and Environmentalism in Thailand, Chiang Mai: Silkworm Books, pp. 117-131.

大島新人

2003『語るモノ、語らないモノ、語られるモノ：モノにたいする視点に関する試論』「モノと情報」班第 4 回ワーキング・セミナー「タイ北部山地民社会研究からみた東南アジア稲作民族文化総合調査関連資料の多角的分析」『総合地球環境学研究所　アジア・熱帯モンスーン地域における地域生態史の統合的研究』討論資料 , 11 月 26 日 , 総合地球環境学研究所。

Sanga Sabhasri

1978 Opium Culture in Northern Thailand: Social and Ecological Dilemmas, in P. Kunstadter, E. C. Chapman and Sanga Sabhasri (eds.), Farmers in the Forest: Economic Development and Marginal Agriculture in

Northern Thailand, Honolulu: The University Press of Hawaii, pp. 206-209.

関本照夫

1987「東南アジア的王権の構造」『現代の社会人類学３　国家と文明への過程』東京大学出版会 , pp. 3-34。

清水郁郎

2002「家屋空間と家屋の所有者―北タイの山地民アカとその家屋（その 1）―」『日本建築学会計画系論文集』559：103-108。

2003「神話の中の家屋―北タイの山地民アカとその家屋（その２）―」『日本建築学会計画系論文集』570：71-77。

2004（印刷中）「家屋に埋め込まれた歴史―北タイの山地民アカにおける系譜の分析―」『日本建築学会計画系論文集』。

白石隆

1984　「国民統合をめぐって」大林太良編　岡・江上・井上監修『民族の世界史６　東南アジアの民族と歴史』山川出版社 , pp. 301-350。

白鳥芳郎

1978「第 1 章　傜族の移動経路と種族史」白鳥芳郎編『東南アジア山地民族誌』講談社 , pp.67-97。

Tambiah, S.J.

1976 World Conqueror and World Renouncer: A Study of Buddhism and Polity in Thailand against a Historical Background, Cambridge: Cambridge University Press.

田口理恵

2004「博物館コレクションをコレクションする―モノ研究からみたメコン流域地域収集の民族資料の可能性―」『Asian Studies Watching 論集～アジア学の最前線』アジア研究情報 Gateway，東京大学東洋文化研究所，http 文書 http://asj.ioc.u-tokyo.ac.jp/html/017.html。

Tapp, N.

1989 Sovereignty and Rebellion: The White Hmong of Northern Thailand, New York: Oxford University Press.

Thongchai Winichakul

1994　Siam Mapped: A History of the Geo-Body of a Nation, Honolulu: University of Hawaii Press.

Toyota, M.

1998　Urban Migration and Cross-Border Networks: A Deconstruction of the Akha Identity in Chiang Mai, Southeast Asian Studies 35(4): 197-223.

常見純一

1980「ヤオ族の移住と村落の形成―マーン＝ラーン＝トン（＜国見＞）を中心として―」山本達郎博士古稀記念論叢編集委員会編『山本達郎博士古稀記念　東南アジア・インドの社会と文化（下)』山川出版社 , pp. 185-211。

内堀基光

1997「序　ものと人から成る世界」『岩波講座　文化人類学　第３巻＜もの＞の人間世界』岩波書店 , pp.1-22。

Vithoon Pungprasert

1989　Hill Tribe People Blamed for Deforestation, in J. McKinnon and B. Vienne (eds.), Hill Tribes Today, Bangkok: White Lotus, pp. 363-367.

Wanat Bhruksasri

1989　Government Policy: Highland Ethnic Minorities, in J. McKinnon and B. Vienne (eds.), Hill Tribes Today, Bangkok: White Lotus, pp. 5-31.

Wijeyewardene, G.

1990　Ethnic Groups across National Boundaries in Mainland Southeast Asia, Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.

吉野晃
1991「タイ北部、ミエン族の移住―移住による村落形成過程―」『社会人類学年報』17: 149-162。

注

[1] ワーキング・セミナーの内訳についてはモノ班の全体報告の中で述べられているが、重複を承知でここにも記しておく。第１回（2003. 7.14）「漁具の会」、第２回（2003.10. 3）「カゴの会」＋稲作調査団記録映画上映会、第３回準備会（2003.11. 5）「利器の会：刃物を中心に」、第３回（2003.11.12）「利器の会：穂摘み具を中心に」、第４回（2003.11.26）「タイ北部山地民社会研究からみた東南アジア稲作民族文化総合調査関連資料の多角的分析」。

[2] これにかかわる調査のメタ人類学的な意義は、田口が詳しく述べている［田口 2004］。

[3] 狩猟具に関しては、2004 年度中に開催する予定である。

[4] ラワは、その後、ラーンナータイやハリプンチャイとのあいだに朝貢関係を結ぶなどした［星野 1990: 178, 191, cf. McKinnon 1983: 332; Wanat Bhruksasri 1989: 8-9］。ラワの他に、カレンとラーンナータイとの貢納関係も指摘される［速水 1992: 274; 綾部 1993: 70］。

[5] ムアンにおいては、仏教が統治と統合の力学としてはたらいた。現在のタイの各地方にはそれぞれ有力なムアンが存在した。19 世紀のバンコクにおいて中央集権的な統治機構が確立されるまで、同地域の全体に一元的支配が及ぶことはなく、各ムアンは独立した統治機構を維持していた。タンバイアはこうしたムアンの特徴を「銀河系政体（galaxy polity）」と呼んだ［Tambiah 1976, cf. 関本 1987; ハイネ＝ゲルデルン 1972］。

[6] タイに限っていえば、いわゆる「山地民政策」のもとでおこなわれた低地への強制移住や、1990 年代の初頭におこなわれた「国外退去」なども広い意味での移住ととらえてよいだろう。1960 年以来、現在まで、タイ政府による山地民の移住計画は数回実行されている。最初の計画は 1960 年から 1961 年にかけて、山地民福祉委員会（Hill Tribe Welfare Committee）によって主導された。また、内務省公共福祉局（Department of Public Welfare）は、政治的、環境的に国土の保全を図るとともに、教育分野などの政府側の支援を容易に受けられるよう、低地に近い場所に山地民を集合させるという定住化計画を唱えた［Kammerer 1988: 7］。1969 年には、山地に潜伏する共産勢力の排除を目的に、共産ゲリラと関係があるとみなされた村や、その疑いがあるとされた地域の村に居住する山地民は、強制的に低地に移住させられた。このときには、多くの山地民がいわれのない疑いをかけられて、強制移住の対象になった［Chupinit Kesmanee 1988: 4］。また、1986 年の３回目の移住計画では、その名目はおもに森林保護にあった。この時点で、森林保護を国策として明確に打ち出したタイ政府は、山地の森林破壊と山地民を結びつけたことになる［cf. McKinnon 1997］。また、1986 年の移住政策では、あくまで国立公園や野生鳥獣保護区に住む山地民が対象だったのに対して、1987 年に再び同様の政策が施行されたときには、その対象は不法入国とみなされた山地民にまで広がり、そうした山地民の村への放火とビルマ側への強制送還などがおこなわれた［McKinnon 1987］。

[7] 土官を流官に改めること、つまり非漢族の土着首領に統治を委ねる間接統治から清朝の派遣する官吏による直接統治へ切り替えること［片岡 1998: 147］。

[8] 国境に関するタイの現在的状況を大島はつぎのように説明する。タイにおいて、山地民などの諸集団は交易などにおいてもともとトランス・ボーダーの状況であった。現在は、むしろ国家がそうした状況を制限していると考えられる。少数民族であっても、タイ国内に居住するかぎり、すべての民族は王のもとで等しく臣民であり、その意味では、タイに少数民族問題は存在しなかったが［白石 1984: 315］、現在のチャクリ王朝が興ってから徐々に、その周縁に位置する諸少数民族を、タイ国民として統合する方向へと向かっていった。それは、国民統合や国土開発という、タイの近代国家への道のりの過程と重なり、また、その過程で、山地民がさまざまな社会問題―ケシ栽培、共産主義への傾倒、森林破壊、不法入国―の当事者としてとらえられるようになった［Sanga Sabhasri 1978; Keen 1983; Eudey 1989; Vithoon Pungprasert 1989; Elawat Chandraprasert 1997］。

[9] ワーキング・セミナーにおける稲村の指摘による。

[10] もちろん、これらのことを議論するには概念定義が必要であり、またエスニシティを実体化することについての議論も必要だが、本稿ではそれが主眼ではないので触れない。

[11] ワーキング・セミナーでは、この点についていくつかの事例が提示された。たとえば、ラフにおける手織りバッグは、ラフ内においても他人がどのサブ・グループに属するのかを識別するための重要な指標となる［片岡 2003］。アカにおいても、衣装や装身具のデザインの相違の他、祖霊をまつる祭壇の形態や素材の違いも、アカ自らが他のアカが属するサブ・グループを識別する指標となる。

[12] こうしたモノへの視点は、人類学のモノ研究、とくに「商品」としてのモノへの視点ともリンクする。現代のモノ研究においては「商品」としてのモノが重要な研究課題となる［内堀 1997, cf. Appadurai ］。モノの「商品状況」すなわちあるものが時として「商品」として売り買いされたり、時として交換され得ない「非商品」としてあらわれたりするようなモノの全体的な状況が、当該の社会の構成と文化的意味によって規定される［内堀 1997: 12］。このようなモノの存在履歴をあきらかにすることから、社会とその背景にある「文化」を理解する筋道が示される。

[13] 稲村は、北タイとミャンマーのアカを、中国雲南省南部のハニと同一の出自と文化を共有する「ハニ＝アカ」ととらえて［稲村 1994: 6]、動態的な視点からの民族誌を記述した。最近では、国家の国民統合の過程や周辺政体との関係の中で、この集団が「民族」として成立する過程、および汎地域的にアカとしての連帯意識が醸成される過程を論じている［稲村 1996a, 1996b]。

[14] 明代以降、中国においてとられた間接統治の政策。いわゆる「辺境」部には、古来、多くの少数集団が居住しており，中央政府の支配を受け入れず、また、中央からも辺境の民として放置されていた。しかし、地方の中央への統合と重なるように各地域の少数民族の酋長を土司・土官に任命し，独自の慣習に従ってそれぞれの集団を統治させた。

[15] 家屋は、住み手のアイデンティティや富、権力を表象する。特定の家屋には霊的な力や資産が集約され、また、その外貌が精緻に飾られたりする。それは、人びとが、社会のヒエラルキー、制度やイデオロギーの形成と維持を、家屋を通して表現するためである［Carsten and Hugh-Jones 1995: 12］。

[16] もちろん、エスニシティの越境を過度に図式化することには十分に注意を要する。たとえば、モン社会の研究者である大島は、長い歴史の過程でタイ社会に同化していったモン人とタイ人のエスニシティについて、仏教文化を例にとり、なにがモン文化でなにがタイ文化なのかすでにその境界があいまいになって久しいと述べる［大島 2003］。

[17] 中国のハニ＝アカ集団に関して、稲村はつぎのように報告する［稲村 2003］。「伝統的」なアカの村落には、通常、２ヶ所に（村落の前と後ろ）に「門」がつくられる。従来は、生木を組んで使っていたが、近年、中国のハニ＝アカ集団では、この門にも漢化の傾向がみられる。また、家屋に関しても、北タイのアカのような男女の部屋の分割はなくなり、２階建て（高床の床下部分を囲って居室とした形態）に変わる傾向にある。

[18] 北タイでは、最近、山地から地方都市へ移住する山地民が増加している。豊田は、アカの都市移住民に関して、慣習的知識や村落への帰属意識といった側面ではとらえることのできない新しいアイデンティティの生成過程を分析する［Toyota 1998]。従来の研究では、慣習的知識や村落への帰属意識は、アカのアイデンティティと集団の組織化の重要な部分を構成すると考えられてきたが、都市移住民のあいだではそれらにとらわれない個と集団の枠組みが生起していることを、豊田の研究は示している。

[19] ひとつの例として、タイにおける仏教布教がある。タイでは 1960 年代の中期以降、タイ国家への帰属観、忠誠心の醸成とタイ的な価値観の導入を目的として、法の巡歴（タンマ・チャーリック）として知られる、公共福祉局と仏教教団（サンガ）による仏教普及計画が北タイの山地民に対してすすめられた［e.g. Keyes 1971; Tapp 1989: 85-91; 石井 1991: 172-175; 速水 1992: 286-287, cf. 速水 1994］。